

# ことばを学ぶ メカニズム

## 認知科学からのアプローチ

今井むつみ  
Imai Mutsumi

### 第5回

## モノはどのように数えるか ② ——知らないことばの数え方

### ✿ 存在論による物体と物質の認識テスト

前回、英語のように可算名詞・不可算名詞を区別する言語と、日本語のように区別しない言語とを比較して、日本語では、すべての名詞が、数える単位を自分で持たない、英語でいうところの不可算名詞にあたるとしたら、日本語話者は、世界に存在するすべてを「物質の塊」と見るのだろうか、という問題について紹介した。

その答えを知るために私は次のような実験を行った。日本語話者と英語話者に、あるモノ（例えば陶製のレモン絞り）を見せた。次にそれと別の物質でできた、同じ形のモノ（木のレモン絞り）と、最初のモノと同じ物質のかけら（陶器のかけら）を見せ、どちらが最初のモノと「同じモノ」なのかを実験に参加してくれた日本人とアメリカ人に尋ねた。

別のときには、物質をある形に形作ったモノ（例えば木くずを角張ったU字型に置いたモノ）を見せ、次に、それと別の物質（革を細かく切ったモノ）を同じ形に置いたモノと、同じ物質（木くず）の山を見せた。この場合も、どちらが最初のモノと「同じモノ」なのかを実験参加者に尋ねた。

二つの選択肢はどちらも可能である。片方は、形が同じで物質が違う。もう片方はその反対で、物質が同じで形が違う。しかし、存在論的区別によれば、最初に示されたモノによって、「同じ」の意味は異なるはずである。陶製のレモン絞りの場合には、物質が異なっても同じ形、機能を持つモノが「同じ種類のモノ」とみなされる。U字型木くずの場合には、物質が同じことが「同じ種類」

を決め、どのような形に置かれたかは関係ない。もし可算・不可算の文法的な区別がモノと物質の本質的な違いの理解を可能にするのなら、英語話者であるアメリカ人はこのとおりに「同じモノ」を選ぶだろう。他方、日本人は、レモン絞りのようなモノの場合にも、木くずのような物質の場合にも、「同じモノ」は物質が同じほうを選ぶはずだ。

日本人も、アメリカ人と同様に、レモン絞りのようなモノの時には、物質が同じほうではなく、形が同じほうを選んだ。しかし、木くずのような物質に対して「同じモノ」を選ぶ際に、英語話者と日本語話者の間で違いが見られた。日本語話者はほぼいつも物質が同じほうを選んだのだが、英語話者は物質が同じほうと、形が同じほうをほぼ半々に選んだのである。つまり、英語話者は日本語話者よりも形に強く注目することがわかった。

さらに、そら豆のような形をした<sup>ろう</sup>の塊や、ゆで卵半分の形をした石膏の塊など、物体と物質の中間にあるようなモノを見せて、「同じモノ」は形が同じで物質が違うモノか、同じ物質のかけらか、と尋ねると、英語話者はほとんどの場合、違う物質でできた同じ形のモノを選んだが、日本語話者は同じ物質のほうを選ぶことが多かったのである。

これらの結果から、当然といえば当然だが日本語話者がモノと物質の本質的な違いを理解せず、世界に存在するすべての対象を物質として認識するというような極端な認識の違いはないことがわかった。日本語話者も、モノに対しては形と機能が同じモノ、物質に対しては、形は違っても同じ物質のかけら（あるいは一部）を「同じ種類のモノ

」と判断する。他方、日本語話者と英語話者の判断がまったく同じというわけではないこともわかった。砂のような形がすぐ崩れてしまう物質や、物質か物体かが、見た目から判断がつかないような曖昧なモノを見たとき、日本人は物質に注目するが、アメリカ人は、形に注目して「同じ」かどうかを決めることがわかったのである。

### ✿ 知らないことばの解釈

日本人とアメリカ人の「同じモノ」判断での違いはどこから来るのだろうか。今度はさきほどの実験で使ったのと同じモノや物質に対して、それぞれ実際には存在しない新奇な名前をつけ、その名前がどちらの選択肢に使えるか、という課題も行った。例えばレモン絞りに対し、「あなたの知らない外国語では、これはフェップと呼ばれます。では、フェップはどちらですか」と聞く。名前というのは、名づけられた対象に対する認識を反映するはずである。実験に参加した人が、命名された対象を「モノ」だと認識していれば、その名前は同じ形を持つ別のモノに適用される。命名された対象を「物質」と認識していれば、同じ物質のかけらや山に名前を適用するはずである。

日本語では、「これは X です」といえばよいが、英語の場合には注意が必要だ。英語は、そもそもそのことばが可算名詞なのか、不可算名詞なのかは、ことばがどのようにいわれるかで、だいたいわかる。例えば“This is a X.”といえば X は可算名詞，“This is (some) X.”といえば不可算名詞である。ただ，“this X”“the X”という言い方だと可算名詞でも不可算名詞でも可能である。そこで、日本語と同じように X が可算名詞なのか不可算名詞なのかわからないようにするため、アメリカ人に対して、“Look at this X.”という言い方で名付けをし、選択をしてもらうときには“Can you find the X?”と聞いた。

日本人とアメリカ人が、形が同じ場合、および物質が同じ場合のどちらに対して、教えられた新奇語で名付けるか。それに関する判断は、日本人もアメリカ人も「同じモノを選ぶ」実験でのそれぞれの選択とほぼ完全に一致していた。

さらにアメリカ人に対して、新奇語を可算名詞あるいは不可算名詞として提示してみた。ある人

には“This is a X.”別の人には“This is some X.”として名前を言ったのである。すると、はっきりと不可算名詞とわかるように名前を言った場合には、名前が可算か不可算かわからなかったときに比べ、物質が同じほうを選ぶ頻度がずっと多くなった。しかし、可算名詞とわかるように名前を言ったときは、可算か不可算かわからなかったときと、選択のしかたがまったく変わらなかった。

つまり、アメリカ人は、可算か不可算かわからないように言った名前を、可算名詞と考えていたのである。英語では、名詞は必ず可算名詞か不可算名詞のどちらかである。可算か不可算かわからない名詞、というのは存在しない。実験の状況で、可算か不可算かわからないように新奇語を言っても、そのことばを聞いた人は、それが可算名詞なのか、不可算なのか決めなければならない。英語では可算名詞のほうが不可算名詞より頻度が高いので、このような判断を行うとき、英語話者はとりあえず、可算名詞だと受けとるようである。

### ✿ 文法カテゴリーが生む態度の違い

言語によるモノの分類の影響は、個別のモノをどのように認識するかと言うことに留まらないかもしれない。例えば英語話者はどのようなモノを見ても、それが数えられるモノか数えられないモノかを瞬時に決めなければならない。対して日本語話者は目の前のモノが数えられるか数えられないかよくわからないとき、曖昧なモノは曖昧なままにしておこうとするのではないか。考えてみると助数詞がよくわからない名詞には汎用助数詞「つ」を用いてすましてしまうことができる。

欧米人は2つの対立する理論に対してそれぞれを支持するデータを提示されるとどちらかのデータが正しくどちらかが誤りであると考えて。それに対して、東洋人はどちらのデータも否定せず、弁証法的に2つの理論を統合して矛盾を解決しようとする傾向があると言われている。すべてのモノを必ず可算・不可算のどちらかに二分する欧米の言語と曖昧なモノを無理にクラス分けしない日本語の違いは、日本語話者と欧米言語話者の社会的態度にも及んでいるのかもしれない。

(慶應義塾大学教授)